
ものがたりのうぶごえ

九九人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ものがたりのうぶごえ

【Nコード】

N1388W

【作者名】

九九人

【あらすじ】

コミティア用の冊子に執筆していた小説です。今まで投稿してきた掌編小説よりかは長いです。

主人公マコトは自殺した少女、昭和堂愛子のことを忘れることができなかった。マコトは愛子が自殺した原因を探すため、彼女が所属していた文芸部室へと行く。マコトはそこで愛子の妹と会い、真実を知る。

ある時、昭和堂愛子は僕にこう言った。

「物語が生まれる瞬間って、どんな時だと思う？」

彼女は文芸部の部長だった。ただし、所属部員は二人だけの、ほとんど遊びみたいな部だった。

僕は少し考えて、自分なりの答えを言った。

「……プロットを考え終わった時かな。自分の中でストーリーに整合性がついて、それをどう書いていくのかが具体的に決まった時」
違うわ、と彼女は言った。

「あなたは、自分が物語を創りだしていると思っているでしょ？
でも違うのよ」

何が違うんだ、とむっとしながら僕が言つと、彼女はにやりと笑った。

本人にそんなつもりはないのだろうが、幼い顔の造りの彼女が大人びた表情を見ると、ちよつと背伸びをしているようで、そんな彼女を僕は素直に可愛いらしいと思った。

「物語にはね、命が宿っているの。人は命を一人だけで創りだすことはできない。だから物語はね」

——人が何かに恋した時、生まれるのよ。

そう言った彼女の髪は、夕焼けで黄金色にきらきらと輝いていたのをよく覚えている。

その彼女は、十五歳の初夏にこの世を去った。

一カ月間学校をずる休みした僕は、まず三階にある自分の教室へ行き、閉じてあったカーテンを開いて窓を開けた。心地のいい風と共に、夏独特の若草のような匂いが僕の頬を撫でていった。

窓から外を覗くと、広いグラウンドが見えた。普段は部活動をする生徒で賑わっているのだが、まだ朝練をする時間ではないらしい。時計を見るとまだ七時前だった。

こんなに早く学校に来て、僕はいったい何がしたかったのだろうと考え、並べられた座席の一つを見下ろした。

窓側の隅。もう誰も座ることのない、悲しい座席。

机に近寄り、その表面を右手でなぞると木のささくれが指に刺さった。けれど痛みはない。それは僕の心が麻痺しているからに他ならないんだろう。

「マコトくん」

名前を呼ばれて振り返ると、薄紫色のスーツを着た女性——歌島先生が教室の扉の前に立っていた。

「おはようございます、歌島先生。お早いですね」

「教師だからね」

歌島先生は笑みを浮かべた。化粧つ気もないのに、その笑顔はこの学校の男たちを魅了してやまない。

「その席って確か……昭和堂さんの席よね？」

歌島先生が近寄ってきて、僕が触れている机を指差す。

「違いますよ」僕は言った。「彼女はもういないから、この席は誰の席でもないです」

僕が特に表情をつくらずに言うと、歌島先生は顔をしかめた。

「マコトくんの屁理屈っぽい言い回し、私は好きじゃないわ。そんな言い方、誰も幸せにならない。あなたが一番傷ついているはずよ」
「どうだろう、僕は傷ついているのだろうか。もう僕には心なんてない気もする。」

「でも、言い方は少しまずかったですね。気をつけます」

僕は素直に頭を下げた。しかし「何が『でも』なんだか」と歌島

先生は怒ってしまった。先ほどの柔らかい口調が一変、攻撃的な口調になる。

「あなた、昭和堂さんを愛していたでしょう？　なんでそんな言い方が出来るの？」

”愛していた”か。

……ああ、そうだ。その通りだ。僕は彼女を愛していた。

「マコトくん、いつまでそうやって呆けているつもりなの？　そんなじゃ、いつまでたっても昭和堂さんは浮かばれないわよ」

……あんたにわかるものか、目の前で死なれてしまった自分の気持ち。

喉元まで出かかった嵐みたいな叫びを無理矢理腹の中に飲み込んで、僕は俯いた。

黙りこくってしまった僕に呆れたのか、歌島先生は踵を返して教室を出た。

「あ、そうそう。そういえばマコトくん。国語科の嶋田先生と何か約束があるみたいね。朝のうちに会っておいたほうがいいわよ」

最後に歌島先生はそう言って、廊下を歩いて行ってしまった。

時刻を見る。時計は七時をちょっと過ぎていた。HRの開始まではまだ一時間以上あるが、用事が出来てしまった。

嶋田先生の話は長い。

僕は荷物を教室において、先生がいるであろう国語科準備室へ向かった。

昭和堂愛子と僕の関係は、それほど単純なものではなかったように思う。少なくとも、恋愛関係ではなかった。

僕と昭和堂愛子が初めて出会ったのは一年一組の教室だった。入学した当初から僕らは同じクラスで、以降三年間、ずっと同じクラスだった。

「あなた、もしかして私と同類ですか？」

彼女は僕と初めて出会った時、彼女は僕にそう訊いてきた。僕もまた、彼女に出会った時に彼女のことを『同類』だと感じた。そして互いのその予感当たっていた。

僕らは、小説を書くことしか出来ない。

そういった人種がこの世にはいるのだ。人とコミュニケーションをとることが苦手。物事を上手くこなすことが苦手。世の中に合わせていくことが苦手。生きることにも不器用な僕らは物語を綴ることで自分の存在意義をこの世に求める。そういった人種が僕——森田誠であり、昭和堂愛子だった。

僕らはすぐに意気投合した。放課後の僕らは文芸部室に集まり、小説を書き、互いの批評をした。彼女は学校の勉強が苦手だったのでそちらは僕が教えていたが、小説になると僕は彼女に教わる立場だった。それほど昭和堂愛子は素晴らしい小説を書いた。

そんな彼女が自殺を決行したのは、本当に唐突だった。

今から一カ月前、梅雨が明けきっていない日のこと。

僕は昭和堂愛子に屋上へ呼び出された。

その時の様子は鮮明に思い出せる。

雨が降っているにも関わらず、彼女は傘も差さずに屋上の鉄柵の向こう側に立っている。彼女の頬にべったりと髪がはりついていて、彼女の表情は隠れていた。

僕が来たのを見つけたのか、愛子は髪をかきあげて僕に笑顔を見せた。

その笑顔は儚げで、この世の何にも囚われていないような、幽霊のような笑顔だった。

そして、

そして彼女は。

「バイバイ、——」

彼女は、屋上から身を投げた。

落ちていく彼女の姿を、僕は茫然と眺めていることしかできなかった。とつさのことに体が反応できなかったのだ。

遺書はなかった。

彼女が自殺した理由を、いまだに僕は知らない。

放課後、僕は久しぶりに文芸部室に足を運んでいた。もちろん部活動をするというわけではない。

僕は、彼女が自殺した真相を探りたい。

ここになら何かの手がかりがあるかもしれないと思ったのだ。毎日のように彼女と過ごしたこの場所になら。

部室のドアに手をかけ、開けようとした時に、前から見知った女生徒が歩いてくるのが見えた。

「あ、マコトさん！ お久しぶりです！」

ぺこりと頭を下げた彼女は、愛子の妹、昭和堂時子だった。愛子とは二歳離れているから、今は中学一年生か。頭は茶色に染めていて、耳にもピアスを着けている。おとなしい系だった姉とは正反対の妹だ。

「……おい、昭和堂。その髪は校則違反だぞ。あと、僕を名前で呼ぶなよ、馴れ馴れしいぞ」

昭和堂時子は現在残っている唯一の文芸部員だった。

「細かいことはいいじゃないですかあ」

僕の指摘に、時子はべーっと舌を出した。彼女のそういう生意気なところが、僕は苦手だった。

「マコトさん、部室に来るなんて久しぶりじゃないですか。いや、それより会うの一カ月ぶりじゃないですか？ 今までちゃんと学校来てました？」

久しぶりに会った時子は、まったく変わった様子ではなかった。普段通りに姦しく僕に絡んでくる。

普段通りに。

姉が死んだ後だというのに。

「ああ、学校にはちゃんと来ていたよ。今まで会わなかったのは偶然」

「ええー、本当ですかー？」

「本当だとも」

嘘だ。

「おかしいなあ、私、けっこう探してたのになあ」

時子は顎に手を当ててぶつぶつと何かひとりごとを言っていた。

僕は彼女を無視する形で部室の扉を開け中へ入った。

「あ、待ってください」

僕が中へ入ると彼女も追いかけてきた。正直、うつつしいと思っ

た。「マコトさん。なんでまた文芸部にきたんですか」

「……ちよつと忘れ物を取りにね」

愛子が無故自殺をしたのか調べにきた、なんて言えるはずもない。僕は誤魔化して、狭い部室を見回した。

部室はまったく様子が変わっていなかった。棚が四つ並んで部屋の壁にあり、卒業した生徒たちが書き残していったのだらう、たくさん

さんの小説がファイルに納まって棚に収納されていた。ここに來たからといって特に目星をつけていなかった。僕はひとまず、三カ月ほど前に愛子を書いた小説のファイルから見っていくことにした。彼女が書いた小説の中に何かのヒントがあるかもしれないと思っ

たのだ。「正直、マコトさんはもう二度と文芸部室に來ることはないと思っ

ていましたよ。だから久々に來てくれて嬉しいです」
後ろでは、何かを時子が喋っている。しかし、僕の耳にはもうその声は半分ほ

なくなるのだ。僕の目は、耳は、全ての五感は、愛子が書いた小説に意識がいつている。

ルーズリーフにシャーペンで書かれた、彼女の小説。見慣れた文字の中に何かの鍵はないだろうか。見逃すことないようよう一文字一文字を目で追いかけて、必死で探る。

時子はまだ後ろで何かを喋っていたが、自分の声が届いていないのを悟ったのかいつの間にかおとなしくなっていた。もう帰ったのかもしれない。

僕はそれから二時間ほど、愛子の残した小説を血眼になって読み続けた。気付けばもう下校時刻になっていて、外は夕焼けでオレンジ色に染まっていた。

さすがに集中しすぎたかもしれない。

僕はファイルから目を上げると、時子は部室の入口でずっと立っていた。

「あ、マコトさん。読み終わりました？」

「何だ、まだ帰っていないか——」

「——マコトさんは」

時子は僕の言葉を遮った。

「マコトさんは、やっぱりお姉ちゃんが自殺した理由を探っているんですね」

彼女の表情は、今まで僕に見せたことのない表情だった。悲しんでいるような、いや、憐れんでいるような。誰に？ 僕にだろうか。「いや、そんなことはない。僕の忘れ物は書類なんだ。ここに来た時、書類は見当たらなかったから、ファイルの中に挟まっているんじゃないかと探していたんだ」

苦しい言い訳だった。時子にもそれが嘘だと伝わってしまったている。

「マコトさん。もうお姉ちゃんのこととは忘れてください」

彼女は断言するような口調で、はっきりそう言い切った。

「……なんでさ」

納得できるわけがない。忘れるだなんて、そんなことは無理だ。

「お姉ちゃんが死んだ理由が分かったって、誰も幸せになんてならない。特にマコトさん、あなたはただ傷つくだけですよ」

「……時子、お前、愛子が自殺した理由を知っているのか？」

時子はしまった、という顔をした。慌てて逃げ出そうとする彼女の腕を、僕はとっさに掴んだ。

「マコトさん、っ、痛い……」

「教えてくれ、時子！ 愛子は何で死んだ？ 何で僕に相談せずに死んでしまった。教えてくれ！」

「痛いっ、痛いです！ 放してください！」

その言葉で僕は我に返った。強く握りしめていた彼女の腕を放す。握りしめていた部分は青くアザになっていた。

「ごめん。ちよっと頭に血が昇ってた」

「いいえ……」

しばらく気まずい沈黙が舞い降りた。僕も、時子も、何も喋らない。外でわななくひぐらしの鳴き声が、僕らのこの、どこへぶつければいいのか分からないやるせない感情を代弁してくれているかのようだった。

「マコトさん」

沈黙を破ったのは時子のほうだった。

「一カ月前、私がマコトさんに告白したの覚えていますか？」

「ああ……」

確かに覚えている。

僕はこの子に告白をされ、振った。しかし、何でこのタイミングでそれを言うのだろう。

「私、イヤな子です」

時子はぼつり、とそう言った。まるで、自分がこれから言おうとすることへの許しが欲しいというように。

「お姉ちゃんが自殺した理由を教えるから私と付き合ってください……って言ったら、どうしますか？」

「な——っ！」

何を言っているんだ、お前。と言い切ることは出来なかった。いつの間にか時子は僕の目の前にまで迫っていて、僕の視界は時子の顔で埋まっていた。そして唇に柔らかな感触。その感触は一瞬で離れた。

キスをされたのだと気付くまでには、何秒か時間をかけた。

恥ずかしげに頬を赤くする時子の視線は、しかし目を逸らさず僕のほうに向いたままだった。その視線に、僕のほうが気恥ずかしさを覚えてしまう。

「私、まだ好きなんです。マコトさんのこと。フラれて一カ月立っても、忘れられない」

彼女は僕の目を見据えたまま、そう言った。僕はそのまますぐな視線に耐えきれず、床に視線を落とした。

「……そう言われても、困る」

夕陽によって映された僕らの影が、重なって一つの大きな影に見えた。その一つに折り重なった影が、離れて再び元の二つの影になる。顔を上げると、時子が一歩後ろに下がっていた。

「やっぱり、私じゃ駄目なんですか」

「……ああ」

「どうしても、ですか？」

「……ああ」

彼女はぎゅっと唇を噛み締めた。

「理由は、一か月前と同じですか」

——ごめん、年下とは付き合えない。

僕はそう言っで一か月前、彼女の告白を断った。

こくり、と僕は頷いた。

彼女は眼を真っ赤にした。僕がその目にたじろぐと、彼女は踵を返して部室のドアを開け、廊下へ走り去っていった。

「待つてくれ！」

僕の声が届くはずもなく、時子の走っていく音がしばらく廊下に残響していた。

「クソッ！」

僕は時子を追いかけた。

帰宅時間をとくに過ぎていた校舎はほとんど無人で、廊下を全力疾走していても誰にも注意されなかった。時子は校舎の奥に向かっていた。僕は駆けていく時子の後姿を必死になって追いかけた。このまま廊下をまっすぐ行けば屋上へ通じる階段がある。僕の頭に不吉な想像がよぎった。

僕の予感はずたつてしまった。彼女は屋上へ続く階段を駆け、その扉を開けた。……くそつ、一か月前に事故があつたつていうのに鍵がかかっていないのか。

「待て、時子！」

僕の静止を振り切つて、時子は夕焼けの屋上へと走つていった。

僕も彼女を追いかけ、階段を上り屋上の扉を開ける。

そして。

その光景は、あの日の再現のようだった。

鉄柵の向こうで彼女は夕陽を背景にして立っている。僕は扉を開けた状態で静止している。

「……バカな、ことは、やめろよ」

僕は切れる息もそのままにそう言った。しかし、時子は涙をぼろぼろと流しながら鉄柵の端を掴んでいる。あんなに少ない足場じゃ安定しないのか、ゆらゆらと風が吹く度に彼女の体が揺れた。

「マコトさんは、私の行動がバカなことだと思いますか」

時子は声を震わしながら、僕にそう問いかけてきた。

……近づけない。僕が近づいて彼女を刺激したら、どうなるかわからない。

「……僕にはわからないよ。何でそんな理由で死のうなんて思える

のかが」

「わからない、ですか」

ふっ、と時子は皮肉げな笑いを浮かべた。

「同じ理由ですよ、お姉ちゃんと」

「同じ理由？」

愛子も、誰かに告白して振られたというのか？ 誰に？

「そう。あなたに」

「な——」

意味が分からない。僕は愛子に告白されてないし、愛子が僕のことを好きだったことすら知らない。

「何か勘違いしているんじゃないか？」

僕は時子に聞いたです。本当に、なにかの勘違いとしか思えなかった。

「私が一カ月前に告白した時、お姉ちゃんも見ていたんですよ」

それは。

——ごめん。年下とは付き合えない。

時子を振った時のあの言葉。

「その言葉で、お姉ちゃんも思ったんでしょね。『ああ、それじゃあ私もダメなんだ』って。マコトくんに告白してもダメなんだって」

彼女は笑顔を浮かべた。儚げで、この世の何にももう囚われていないような笑顔だった。一カ月前の、愛子と同じ——

「だから、ね。私も」

「よせ、止める！」

僕は叫ぶと同時に走り出していた。間に合うだろうか。いや、間に合わせなければ。あの日、あの時の悲しさを繰り返さないために。もう自分の目の前で、愛する生徒を死なせないために。

「バイバイ、先生」

時子の体が傾く。屋上と空の境界を大きく踏み外し、彼女の足は地上を離れる。

間に合うか。

僕は間に合うだろうか。

二十六歳の僕の足は先ほどの全力疾走で限界が近い。そんなもの知るか。自分の生徒を助けるだけに全力を出さない教師がいるか。

走りながら手を伸ばす。

一カ月前の後悔。それすらも今は足を速く動かすための起爆剤だ。鉄柵の隙間に腕を通し、彼女の手首を掴んだ。

細い、細い手だった。

肩に重い衝撃。すさまじい負荷。けれど、手は離さずにすんだ。

「マコト先生、何で……」

腕がじんじんと痛む。けれど、それをなるべく顔に出さないように笑顔を取り繕った。

「僕は教師だからね。愛する生徒が死のうとしているのを黙って見過ごすわけにはいかないんだよ」

「何それ。ずるい」

彼女の目から涙が一筋流れた。それは頬を伝って、彼女の代わりに地上へ落ちていった。

「マコトくん」

時子の自殺未遂から何日か経過した。

いつかのように僕は自分が担任を受け持っている教室で朝のHRの準備をしていると、いつかのように、歌島先生が教室のドア付近に立っていた。

「歌島先生、おはようございます。あ、それとこの前言いそびれましたけど、僕を名前で呼ぶのは止めてください。この学校の生徒だ

った時はいざしれず、それでも今の僕は教師ですよ」

僕がそう言うと、歌島先生はクスツと笑った。

「生意気な口を聞くようになったじゃない。私に言わせればあなたはまだ手のかかる教え子よ。なにせ、自分のクラスの女性徒が自殺したっていうのに、他の子のケアをするでもなく、諸々の対応をするでもなく、その他仕事を一切放棄して一週間もシヨックで寝込んでじゃうようじゃあね」

言い訳のしようもなかった。社会人として、教師として、大人としてあるまじき責任放棄を僕はしてしまったのだ。俯く僕に歌島先生はさらに続ける。

「後、君は一人の生徒に思い入れを強く入れすぎていた。生徒を愛すること自体はかまわない。けれど、教師の愛っていうのはね、生徒全員に平等に与えられるべきなのよ。誰か一人に偏ってはいけない」

「……おっしゃる通りです。僕が未熟でした」

拳を握りしめ、自分への情けなさに耐える。——誰か一人に教師の愛は偏ってはいけない。そんなの当たり前のことだ。けれど、僕はそれが出来なかった。彼女——昭和堂愛子は僕にとってはそれほどに特別な存在だった。

「分かるわよ、なんとなく。昭和堂さんって、高校時代のあなたにとっても似ていたもの」

「……同類、ですからね」

自嘲気味に唇を歪めた僕の頭にぽんつと歌島先生の手のひらが置かれた。

「でも、マコトくんは今回頑張ったわ。生徒の命を一人、救ったんだもの。これは誇るべき成果よ」

歌島先生の手のひらは夏だというのにひんやりと冷たくて、心地よかった。それなのに先生の言葉は暖かくて、僕の心にゆっくりと浸透していった。

その先生の暖かさに、僕は思い出す。僕が何故教師になったのか。

小説を書くことしか出来なかった僕。周りに友達なんていなかった。孤独だった。そんな僕の唯一の理解者が、当時担任だった歌島先生だった。

僕は歌島先生を尊敬し、憧れて——好きだった。心の底から、好きだった。

——同類。

こんなところまで僕と愛子は同じなのか、と心の中で苦笑する。
教師を好きだった愛子。

先生が好きだった僕。

「歌島先生、僕を子供扱いしているでしょう」

僕は気恥ずかしい気持ちをこらえてそう言った。こんな頭を撫でられている姿を生徒にでも見られたら合わせる顔がない。

「あら、マコトくんはいつまでも私の教え子よ」

にこりと笑う先生と目があって、心がどきりと跳ねた。この至近距離からの笑顔は反則だ。

彼女——昭和堂愛子が言っていた言葉を思い浮かべる。物語は人が恋をした瞬間に生まれるのだと。

先生の笑顔を見た瞬間、確かに僕の耳にはその歡喜の声が聞こえていた。

彼らが謳う生への喜びを。

今夜は、久しぶりに小説を書くことと思った。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1388w/>

ものがたりのうぶごえ

2011年8月26日03時14分発行